

あおくさ 青草は

■ 楽曲データ

歌詞：目良初子 作詞

楽曲：古関裕而 作曲

発表：大谷楽苑 1948年

初演：大阪毎日ホール 1948年

初出：『讃仰歌』 大谷楽苑 1948年

管理番号：M1767

■ 創作の経緯

大谷楽苑より「讃仰歌」第4番として、1948（昭和23）年10月発表。同楽苑の結成が前年1947（昭和22）年2月なので、作曲はこの間に行われたと推測される。歌詞は公募によるというのが、詳細不明。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第3巻収録

底資料：『讃仰歌』 大谷楽苑 1948年

校訂の詳細：特記事項なし

■ 解説

◆ 作品について

1番の歌詞に、「焦土」という言葉があります。家屋などが焼け失せてしまった土地のことで、空襲によって焼け野原と化した日本の様子を表しています。この歌詞からも分かるように、この作品は戦後間もない時期につくられました。おそらく1947（昭和22）年から翌年にかけてのことと思われます。真宗大谷派で結成された「大谷楽苑」により、讃仰歌の第4番として発表されました。

作曲は、昭和を代表する作曲家の古関裕而（1909～1989）。《君の名は》《栄冠は君に輝く》など、古関の作品は歌謡曲や応援歌、行進曲と多岐にわたり、没後20年以上を経た今日でもしばしば耳にします。仏教讃歌では、《しんらんさま》《みめぐみの》がよく歌われています。

目良初子（生没年、経歴等不明）による歌詞からは、戦争の傷跡が生々しく残る当時、み教えが人々の心のよりどころとなっていた様子がうかがえます。作品の発表から60年ほどが経っていますが、私達の抱える苦しみや悲しみは、今も昔も変わりません。どんなときでも私達とともにいてくださる阿弥陀さまを思いつつ、歌っていただきたいと思えます。

◆練習のヒント（メロディーについて）

- ①ドラマティックな曲調です。旋律には跳躍が多く用いられ、強弱も大きく変化するので、仏教讃歌のなかでは難しい作品かもしれません。音取りができたなら、4小節をひとまとまりに感じ、そのなかで大事だと思う言葉を強調するように歌ってみましょう。また、歌詞の句切れが1～3番で異なるので、注意しましょう。
- ②1番と2番の歌い出しは、母音です。それぞれ響きのよい発音と、正しいピッチを心がけましょう。
- ③7・8小節目の「焦土にしげり」の歌い方を工夫しましょう。ここでは7小節目4拍目の「ミ」がいちばん高い音のため、何気なく歌うと、この音が自然と大きくなってしまいます。ですが、ここの「に」は助詞なので軽く歌うようにして、次の「しげり」という言葉を大切に歌いましょう。8小節目1拍目「し」をテヌート気味に歌うと、メリハリがつくでしょう。2番、3番も同じ要領で。
- ③9小節目に3回出てくる「ド」が、どれも同じ高さになるよう、注意しましょう。11小節目の「ソ」も同じです。
- ④後半は、高い音が続きます。息をたっぷり吸う、支えをつくる、顎の力を抜くなど、準備を整えて歌いましょう。
- ⑤13・15小節の8分休符の長さに気をつけましょう。溜めをうまく使うのが表現のポイントです。
- ⑥最後のフレーズ（17～20小節）にある高→低→高という音の動きは、最後の高い音が下がり気味になるので、特に注意しましょう。また、曲の最後には「本願」「名号」「大慈悲」と大切な言葉が出てきます。フォルテで、堂々と歌いおさめましょう。

◆楽譜について

同声2部合唱版は『讃歌集 二部合唱』第3巻に、混声四部合唱版（原曲）は『聖歌・讃歌集』第3巻に掲載されています。

解説執筆：山口篤子（本願寺仏教音楽・儀礼研究所 [現・浄土真宗本願寺派総合研究所] 研究員）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 80（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第207号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.